琉球大学学術リポジトリ

ボゴール農業大学、ディポネゴル大学を訪問して

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学21世紀COEプログラム広報委員会 公開日: 2009-04-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 日高, 道雄, 土屋, 誠, Hidaka, Michio, Tsuchiya, Makoto メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/9472

ボゴール農業大学、ディポネゴロ大学を訪問して

日高 道雄（遺伝子の多様性研究グループ）
土屋　誠（拠点リーダー）

2008年12月９日から12日にかけて土屋誠（COE拠点リーダー）および日高道雄がインドネシアのボゴール農業大学およびディポネゴロ大学を訪問した。ボゴール農業大学では、先方から要請のあったサンドイッチプログラム(ボゴール農業大学の博士前期課程学生10名が本学を訪問し、来年度後期に約半年間講義を受講する)についての相談をするとともに、本サンドイッチプログラムを将来的にジョイントディグリープログラム(大学院教育の共同実施制度で、学生は両大学連名の修士号を受領する)に発展させる可能性を話し合った。またその話し合いに先立って、本年８月にサンドイッチプログラムの協議のために来沖され、沖縄で亡くなられたアンゴロ氏の遺族への本学からの支援金を水産・海洋科学部長にお渡しした。水産・海洋科学部長と面談した後、土屋誠教授が島嶼生態学と島のモデルとしてのサンゴ群体内での小動物の多種共存機構について講演を行った。本学の海洋科学特別コースの修了生アジ君を含む約50名の学生、教職員が聴講し、活発な質疑が行われた。その後、国際交流課でサンドイッチプログラム担当のユスリ氏を交えて、サンドイッチプログラムに関する話し合いを行った。会議終了後ボゴール農業大学長にも面談する機会があった。ボゴール農業大学では日本の大学で学位を取得した教員が多く、彼らは流暢に日本語を話す。

ジャカルタのホテルに戻った後、インドネシア政府の教育省で、学生交流のコーディネータを務めるアベ氏から夕食の招待を受け、学生交流や協同教育（ジョイントディグリープログラム）の進め方などについて意見交換を行った。彼も、本学特別コースの修了生であり、ディポネゴロ大学から出向している。インドネシア政府は、現在、ダブルディグリープログラムなどの学生交流とともに、若い大学教員が学位を取得するように留学を支援する体制を整えている。インドネシアでは博士号をもつ大学教員がまだ少なく、インドネシア政府は博士号取得者を増やすことを緊急の課題としている。本学にもこのような博士号取得希望者を積極的に受け入れることが望まれる。

翌日の12月10日には、ディポネゴロ大学を訪問するためジャカルタを発ちスマランに到着した。空港には本学特別コースの修了生であるディアさん、ムナシクさんが迎えにきてくれた。ホテルにチェックイン後、共同研究のため一足先に訪れていた竹村明洋準教授と合流し、早速大学を訪問し、学長をはじめとする多くの方々と面談した。昼食後、ディポネゴロ大学の紹介、博士課程の紹介とカリムンジャワでの臨海実験所の建設計画の話、水産・海洋科学部を構成する水産学科および海洋科学科の研究活動、そしてフランスと進めているダブルディグリープログラムなどについてパワーポイントを使って説明を受けた。サンゴ礁研究では、多様な、そして興味深い研究が行われていた。水産学科の人たちは当然のことながら水産生物の増養殖に興味を持っている。我々の方では海洋生物生産学講座があるものの、水産増養殖プロパーの研究者は少なく、増養殖の基礎となる生活史や生態学的な研究が主であること、増養殖自体は国や県の水産研究所で行われていることを理解してもらうことが必要と感じた。その晩は学長主催の夕食会に招待され、インドネシア料理を楽しんだ。11日は午前中に、水産・海洋科学部を訪問し、ジョイントディグリープログラムについて議論した。ディポネゴロ大学とは本年５月１日に大学間学術交流協定（MOU）を結んでいるため、その傘のもとで、どのように学生交流および今後の共同研究を進めていくかを話し合った。今回の話し合いでは、学生交流を進める方向で意見の一致を見たが、共通カリキュラムの構築、それぞれの大学でのジョイントディグリープログラム運営のための組織作り（専攻の学務および事務）、そして学部内でのコンセンサス作りが必要であるので、両方の大学で担当者を決めて今後の相談を進めることとなった。本学では、日高、竹村が、ディポネゴロ大学からはディアさん、イィクさんが実務的な担当者となって今後カリキュラムや交換学生数など話し合っていくこととした。

これらの話し合いの後、本学特別コース修了生３名（ディア、イィク、ムナシク）が我々

をボロブドゥール寺院に案内してくれた。夕食は土屋学部長が招待した。翌12日の午前中には、日高が「サンゴと他の刺胞動物の生活史の多様性について」、竹村が「サンゴ礁魚類のリズムについて」、土屋が「サンゴガニ類の生態について」講演を行った。イィクさん夫妻に昼食をごちそうになった後、スマランをあとにした。

スマラン空港を立ちジャカルタのホテルに到着後、アベさんから我々がインドネシアを訪問していることを教えてもらったと、ジャワ島東部のBrawijaya大学から二人の教員が訪ねてきた。その内の一人アイダさんはやはり本学の特別コース修了生である。彼らもダブルディグリープログラムの相手大学を探していた。我々としてもいきなりダブルディグリープログラムの学生を受け入れるのは難しく、まず若手教員を本学の大学院に留学させたりして複数の学部で交流を深め、大学間交流協定を結ぶことから始めた方がよいと意見した。

今回のインドネシア訪問を通して、本学の特別プログラムの修了生がそれぞれの大学などで活躍していることが強く印象に残った。彼らがカウンターパートとなり、我々との共同研究や大学院教育の共同実施プログラムを行う時代になってきたことは喜ばしいことである。また我々もインドネシアの大学の期待に応えたいという思いを強くした。

今回のインドネシア訪問は、グローバルCOE申請に向けての本学からの中期目標計画実現経費の支援を得たものであり、本学がアジア太平洋域の国際教育・研究拠点になるためのネットワーク形成にいくらかでも貢献できたならば幸いである。

土屋教授の講義を聴く学生、教職員

セミナーでの講演終了後の昼食会
ともに本学特別コースの修了生であるイィクさん夫妻と

会議後に、琉球大学特別コース修了生達とボロブドゥール遺跡を見学（12月11日）

共同教育の実施に向けて双方で努力しようという合意書にサインする両学部長（12月11日）